

平成18年度冬季における琵琶湖北湖でのニゴロブナ当歳魚の資源状況			
[要約]平成6年度以降、毎年冬季に、琵琶湖北湖でのニゴロブナ当歳魚の資源尾数を標識放流調査により推定している。平成18年度における当歳魚資源尾数は6,194,000尾と推定され、調査を実施して以来最多であった。そして、その内訳は、放流魚が67.07%、天然魚が32.93%と推定された。			
水産試験場		栽培技術担当	
[部会]水産		[分野]琵琶湖漁業	
		[実施期間]平成6年度～	
		[予算区分]国	
		[成果分類]行政	

[背景・ねらい]

琵琶湖では、減少したニゴロブナ資源の回復を図るため、様々な事業が実施されている。当场では、それら事業の成果を評価し、今後の増殖対策を検討するため、平成6年度から毎年、琵琶湖北湖においてニゴロブナ当歳魚の資源尾数を調査している。本年度も同様な調査を実施し、過年度の結果と比較した。

[成果の内容・特徴]

当歳魚資源尾数の推定は、標識放流調査により行った。資源尾数推定のための標識種苗は、(財)滋賀県水産振興協会によって生産された種苗であり、平成18年11月27日に、琵琶湖北湖6水域へ平均全長81～93mmの種苗、合計103,000尾をALC標識を施して放流した。再捕調査は、平成19年3月9日～27日に、琵琶湖北湖の沖合で沖曳網により漁獲されたニゴロブナを対象に行った。

調査したニゴロブナは7,002尾であった。鱗の輪紋の乱れを観察することにより年齢査定を行ったが、当歳魚は5,953尾であった。そして、ALC標識の調査を行ったところ、99尾が上記の標識放流種苗であった。

以上の結果をもとにPetersen法により当歳魚資源尾数を推定したところ、資源尾数と95%信頼区間は5,164,000尾<6,194,000尾<7,735,000尾であった。

(財)滋賀県水産振興協会では、放流種苗の一部に別のパターンのALC標識を施したニゴロブナ種苗を放流している。この標識魚の混獲状況から当歳魚資源に占める放流魚の割合を算出したところ、当歳魚資源の内訳は放流魚が67.07%で4,154,000尾、天然魚が32.93%で2,039,500尾と推定された。

平成6年度以降の当歳魚資源尾数の推移を図1に、その内訳を図2に示した。平成18年度の琵琶湖北湖におけるニゴロブナ当歳魚資源尾数は、調査を実施して以来最多であった。また、天然魚および放流魚の資源尾数についても、同様に最多であった。

[成果の活用面・留意点]

平成18年の当歳魚資源尾数が多かった要因として、(財)滋賀県水産振興協会が実施しているニゴロブナの種苗放流について、全長120mm種苗の放流尾数を増やしてきたこと、水田育成種苗の生残率が例年と比較して高かったことなどが考えられた。

[具体的データ]

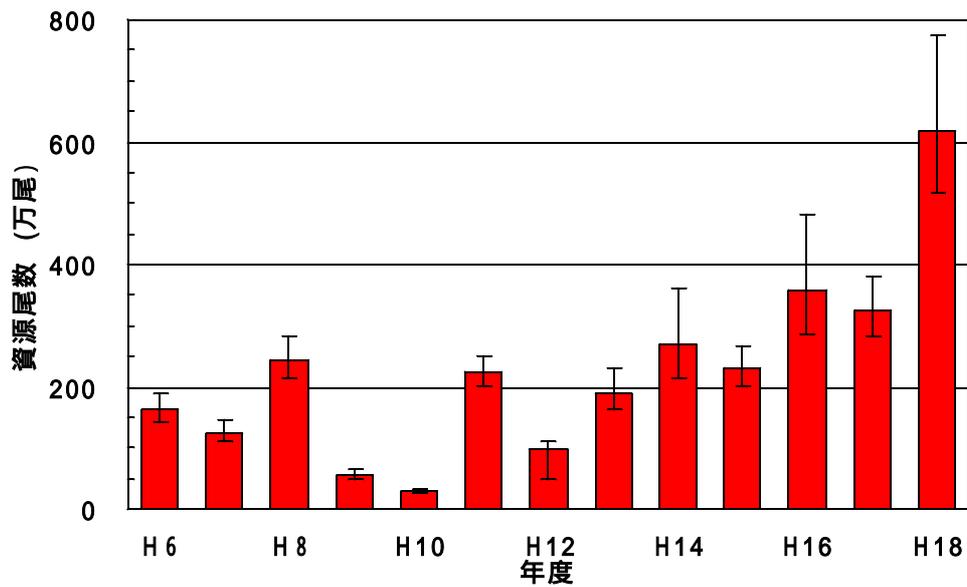


図1 ニゴロブナ当歳魚資源尾数の推移

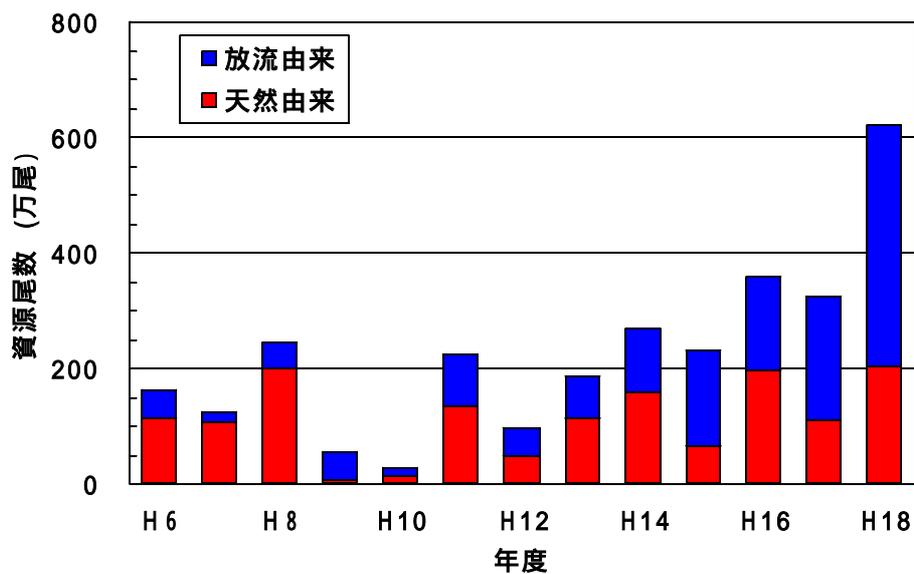


図2 ニゴロブナ当歳魚資源尾数の内訳

[その他]

・ 研究課題名

大課題名：琵琶湖の水質・生態系保全に配慮した特色ある農林水産技術の開発

中課題名：安定的な水産資源の増殖技術の確立

・ 研究担当者名

根本守仁 (H9 ~ H10, H14 ~ H19)